

## 第9回

## 第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

## ヘレニズム時代の思想 ～ボーダレスの哲学～

## 今回学ぶこと

ポリス社会は衰退する一方で、アレクサンドロスの帝国が成立し、やがて分裂する。このヘレニズム時代の混沌とした状況が、ポリスの枠組みを超えた考え方や生き方を生みだしていく。代表的な学派であるストア派とエピクロス派の思想から、現代にも通じるボーダレスな考え方・生き方を考える。



講師

和田倫明

## ■■ ヘレニズムとは何か ■■

古代ギリシア最大のポリスであったアテネが衰退すると、やがてポリスの間の戦いが繰り返され、ギリシャ全体が混乱し、力を失っていく。そして、ギリシャ北方の農業国であったマケドニア王国に、事実上、支配されることになる。やがて王位に就いたアレクサンドロスは、全ギリシャ軍の統帥<sup>とうすい</sup>となって率いて東征、ペルシア帝国を滅ぼし、ギリシャからペルシャ、エジプト、北インドにまで至る大帝國を築いたが、間もなく亡くなり、帝国は分裂した。

この時代は、人的にも文化的にも、ギリシャと、ペルシャをはじめとするオリエントとの急激な交流が進んだ。ポリスという枠組みは意味を成さなくなり、世界市民（コスモポリテース）という、それを超えた考え方や生き方の原理が求められた。

## ■ 「隠れて生きる」という生き方 ■

エピクロスを創始者とするエピクロス派は、「隠れて生きる」ことをモットーとした。社会の混乱を避け、自給自足の共同生活を送りながら、身体健康と精神の平安（アタラクシア）を追求しようとした。

エピクロス派の思想を快楽主義と呼ぶことがあるが、彼らが求める快楽というのは、身体がどうしても必要とする「飢えないこと、渴かないこと、寒くないこと」が満たされ、アタラクシアが追求できるということに過ぎない。つまり極めて質素なものである。

エピクロス派の共同体は、各地につくられて、ローマ帝国時代にも受け継がれていった。

## ■ 「自然にしたがって生きる」という生き方 ■

ゼノンを創始者とするストア派は、アテネの広場にある柱廊（ストア）で彼が講義を行ったことから呼ぶ名にちなんでいる。高德な人物だったので、マケドニア王からも尊敬されていた。英語のストイック（禁欲的な）とかストイシズム（禁欲主義）はここに由来している。

ストア派のモットーは「自然に従って生きる」ことである。エピクテトスはこのことを、物事の本質＝自然をよく理解しておけば、どのような状況に置かれても心乱されることなく、無情念（アパテイア）の境地に至れるという。



### ◆ コラム ◆

ストア派の創始者であるゼノンに、クレアンテスという弟子がいた。彼はもともと拳闘家（ボクサー）で、しかも非常に貧しかった。夜働いて、昼学び、ゼノンによく仕えたが、いわゆる頭のよいタイプではなかった。仲間からも「ロバ」とあだ名され、からかわれたが、ゼノンの荷物を運べるのは自分だけだと言って意に介さなかった。ゼノンはクレアンテスのことを「<sup>ろうばん</sup>固めの蠟板」にたとえた。書き記すのには骨が折れるが、いったん書きつけられるといつまでも消えずに残る。ゼノンの学校を引き継いだのはクレアンテスだった。思想家の弟子には、孔子の子路や、ブツダの周利槃特など、明敏さには劣るがよく師の教えを守る者のエピソードが、しばしば登場する。